

都市のゲシュタルト崩壊と構築
- 東京を連続的に繋ぐ現代美術館 -

21919040 松本 茜
指導教員 宮 晶子 教授

ゲシュタルト 部分と全体 スケール
連続性 差異 都市

1. 研究の背景と目的

自然の造形やリズムが持つ複雑さに魅力を感じる。あらゆるものが途切れることなく連続的に関わり合い、どこまでも続いていると思わせられる。一方で、都市に並ぶ建築物は非常に無機的である。複製されたようなスラブと単調に開けられた窓によって構成された建物1つ1つは、ただそれだけで完結し、特に何かと関わり合うこともなくそこにあるだけである。まるで赤の他人に囲まれて孤立する都会人のように建築もまた孤立しているように感じる。

それぞれが独立して存在している都市に対して有機的な広がりを持つ建築、経験を提案することを本研究と制作の目的とする。

2. 自然とゲシュタルト

2-1 ゲシュタルトとは

自然の造形やリズムなどの有機性を持つものを「ゲシュタルト」と言う。ゲシュタルトの概念を提唱したのが20世紀初頭のドイツで設立されたゲシュタルト心理学である。知覚とは、対象物を構成する要素の個々に対して行われるのではなく、対象物が全体的なまとまりを持って初めて生じる性質に影響を受けることを解明した。この時形成される群全体の特性、「形態質」をドイツ語で全体を意味するゲシュタルトと名付けて部分の全体依存性を主張し、全体は部分の総和以上のものであるとした。

2-2 1/f 法則

まず、ゲシュタルトの形成方法を自然の造形やリズムができるメカニズムを参照して考察する。脈拍や炎のゆらめきなどの不規則性に共通する法則を1/fゆらぎと呼ぶ。図1は1/fゆらぎを持つ星のまばたきのリズムを表したものである。

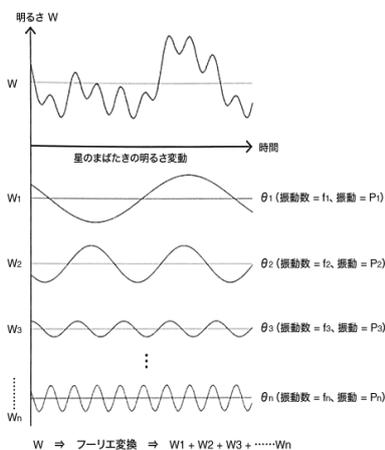


図1 1/f ゆらぎ (※1)

星のまばたきを数値に置き換えて波形に示すと、その不規則な波は複数の単純な波に分解できるのである。つまり異なる単純な波同士の重なりによって引き起こされた複雑性がゲシュタルトとも言えるのではないだろうか。

また、ゲシュタルトを構成するひとつの波もそれ自身がゲシュタルトであり、さらに複数の単純な波へと分解することができると考えられる (図2)。

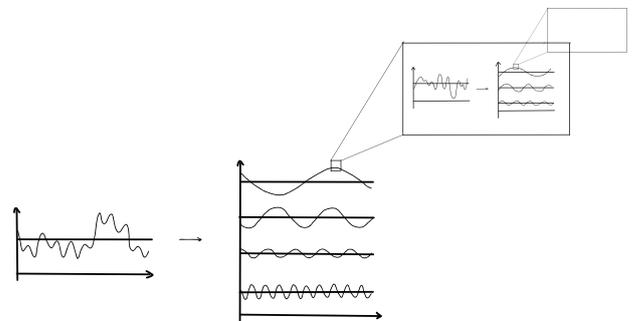


図2 繰り返されるゲシュタルト

3. 芸術におけるゲシュタルト

私たちは音楽やダンス、絵画などの芸術において、ゲシュタルト心理学に基づいて有機的なリズムを知覚している。複数の音がつくり出すメロディを楽しんだり、無数の線からなる絵画を眺めたりする行為はゲシュタルトを構築していると言えるだろう。一方でメロディの中に現れる休止や絵画の中のうねるような筆跡など、部分のみが対象化されるという現象は、時にゲシュタルト崩壊を起こしたと言えるだろう。このように、人々は芸術に触れたとき、ゲシュタルトの構築と崩壊を反復する体験によって、強く揺さぶられるような感覚に陥るのだ。

4. 現代都市と美術館

4-1 種類の多い現代のための美術館

美術館は、王侯貴族が権力誇示を行うためにコレクションを陳列するという目的が発端となり、時代が進むにつれ公共的・社会的な役割を持つ施設へと発展した。現在の美術館の形式は、あらゆる作品に対応できるようにユニバーサルスペースを導入し、ホワイトキューブと呼ばれる白い壁に囲われたものが一般的である。

また、現代の建築について西沢大良氏の発言を参照すると、1つのものがたくさんあったのがモダニズム、数の多さに関わらずとにかく種類が多いのが現代であり、その種類の多さに対応するのが現代建築の課題である。

現代の美術館は、たくさんのもので溢れる都市の真ん中に、ホワイトキューブによって空白を作り出し、そこに作者や系統によって選び抜かれたもののみが展示される。しかし、そのような場所だけが美術館なのだろうか。ものの種類が多すぎると言える現代の都市でしか実現できない美術館のあり方があると考えられる。

4-2 都市東京とゲシュタルト

都市はゲシュタルト的である。人、車、電車、川、高速道路。たくさんの要素が存在し、それぞれのリズムを刻み、それらがお互いに良い関係を保てるように整備されている。様々な異なるゲシュタルトが重なる都市は、高所から俯瞰的に見れば建築群が地形を構成するかのような1つのまとまりとしてのゲシュタルトがあり、近視的に足元の植木鉢や看板、壁面に這う配管などを見ればまた異なるゲシュタルトを構築している。しかし、その間はそびえ立つ高層のビルやマンションによって断絶され、そのことにも、都市全体がゲシュタルトとして存在していることにも気付くことなくいるのが東京という都市ではないだろうか。

5. 設計提案

5-1 敷地

敷地は港区麻布十番にある一の橋公園とする。この上空には首都高速都心環状線と2号目黒線が合流する一ノ橋ジャンクションがまたがり、地上には国道415号線、地下には地下鉄南北線と大江戸線が通る。各方面からやってくる人々の結節点であり、また、各方面へ分散していく出発点でもある。さらに、渋谷から東京湾へと続く古川が敷地を2分割するように流れ、敷地内で直角に折れ曲がるような特異な地形を持つ。地形としてこの土地に昔から存在する川、それを避けるようにして建てられた建築、さらに建築が建てられなかった川の上空が空白となり、建築物の間を縫うようにして高度経済成長期に高速道路が通された。人々の欲求によって建設された構造物が積層し、時間のレイヤーの重なりを体感することができる。



図3 敷地の航空写真（1923年、1967年、2022年）（※2）

この敷地はもので溢れる都市の中でも特に様々な要素を含んだ場所である。また、それらの要素についてそれぞれ複数の種類のリズムが交錯する。領域は敷地境界、高架、川によって複雑に構成される。この敷地を眺める視点は通行人、来館者、一般道の車、高速道路を走る車、近くのビル、東京タワーと様々な高さや角度が想定される。さらに、人間の歩行、車の走行、川の流れ、雲の流れなどあらゆる速度が存在する。

5-2 設計趣旨

現代都市、東京における新たな美術館を提案する。

合理性を重要視して形作られた建築は、何かと関係を持つこともなくただ自立して建っており、もの、人間、建築、都市の間の連続性を分断しているように感じる。そんな都市にある様々な要素のずれを利用して建築を設計し、さらにそこでの体験が人々の都市に対する見方をちょっと変えるようなものであれば、人間と都市の間に有機的な連続性を生むきっかけとなるのではないかと考え、そのための美術館を提案する。

5-3 設計手法

5-1で述べた敷地にある様々な要素を利用して設計を行う。これに伴い、人間と建築の間に複雑な関係性が築かれる。また、その建築での体験は都市を切り取り、当たり前前の風景となっている都市に隠れるずれを増幅するようにして対象化することで、都市に対する新たな意識形成のきっかけとする。建築と、そこでの都市東京の風景のゲシュタルト崩壊と構築を繰り返す経験が、人間と都市の間に失われていた連続性を生み出す役割を果たす。

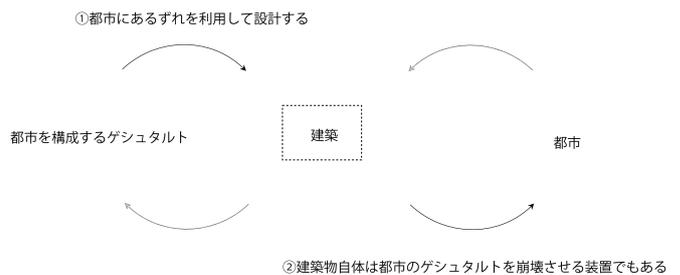


図4 設計の流れ

画像引用

※1 森林・環境建築研究所 調和する不規則性を表す数式

https://www.fb-studio.jp/fb_idx/page-1485/ 2022/12/28

※2 Google Earth 2022/12/29

主要参考文献

・W・ケーラー『ゲシュタルト心理学入門』東京大学出版会 1971年

・ジル・ドゥルーズ『差異と反復』河出文庫 2007年

・私の建築手法 東西アスファルト事業協同組合講演会

https://www.tozai-as.or.jp/mytech/05/05_taira06.html 2022/11/20